

「生涯スポーツを通じた地域貢献」  
～スポーツ GOMI 拾いによる日本活性化の提案～

多摩大学 相原ゼミ

○飯島 海                      高橋 健太                      中村 雄介                      堀田 浩平  
山縣 雄樹

① はじめに

今日、日本のスポーツ事情を学んでいく上で、子供たちの運動時間及びスポーツをする副次的効果を得られる機会の減少という問題が顕著に現れていることがわかる。幼少期の運動は、子供の成長過程において必要不可欠である。神戸大学 発達学部 平川和文教授は「運動の適時性」の重要性をこう述べている。「小学校時代は神経系が著しく発達しますので、いろいろな運動をさせ、基本的な動きを習得することが大切です。そして中学校では身長が増加に見られるように身体の発育が著しい時ですので、持久的運動を負荷する必要があります。高校になりますと、身体の成長も完成に近づき筋肉系も発達してきますので、筋力増強等の無酸素運動も導入します。そして大学生になりますと身体も完成しますので、運動の質量とも高いスポーツ活動を楽しむことができます。このように成長過程に応じた運動刺激を与えることが運動の適時性です」

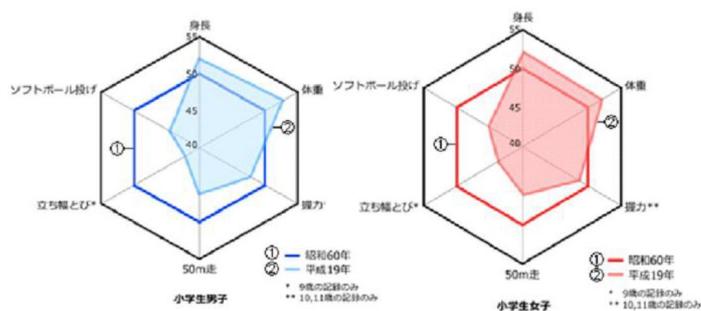
以上のように、子供時代に運動をすることが大切だとわかる。子供たちの成長の観点からこの問題を早急に解決する提言を行う。

② 現状分析

文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、子供たちの体力・運動能力は、昭和 60 年ごろから現在まで下降傾向が続いている。現在の子供たちの結果をその親の世代である 20 年前の子供たちと比較すると、体格が良くなっているにもかかわらず、体力が低下している（図 1 参照）という結果が出ている。小学生から高校生の成長期にかけての運動時間は、子供たちが心身ともに成長する上で、重要な時間である。それにも関わらず、子供たちの運動時間が低下している原因は、保護者をはじめとする国民の意識の中で、外遊びやスポーツの重要性を学力の状況と比べ軽視する傾向が進んだことにあると考えられる。（図 2 参照）また、生活の利便化や生活様式の変化は、日常生活における身体を動かす機会の減少を招いている。また、親子での運動・スポーツ実施と子ども自身の運動・スポーツ頻度の関係をみると、親子で一緒に定期的に運動・スポーツを実施している子どもの場合、子供自身の運動・スポーツ実施状況は、非実施群 2.8%、高頻度群 41.9%である。

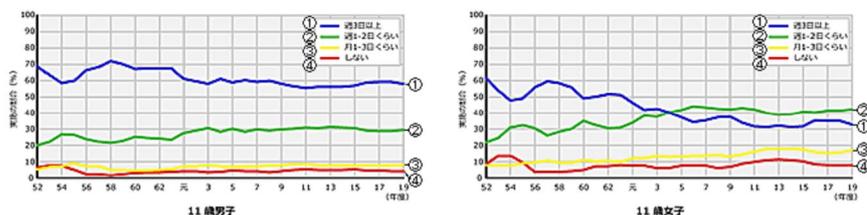
一方、親子で一緒に運動・スポーツを行っていない場合、子供たち自身の運動・スポーツ実施状況は、非実施群 13.6%、高頻度群 31.1%となっている。つまり、保護者と一緒に運動・スポーツを実施している子供ほど、自身の運動・スポーツ実施頻度も相対的に高くなっていることがわかる。このように、親子での運動・スポーツ実施は、子供自身の運動・スポーツ実施と深く関わっている状況がうかがえる。(図3参照)

図1 子供の体力・運動能力の20年前との比較



出所 文部科学省「平成19年度体力・運動能力調査」より [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/11/08100803.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08100803.htm)

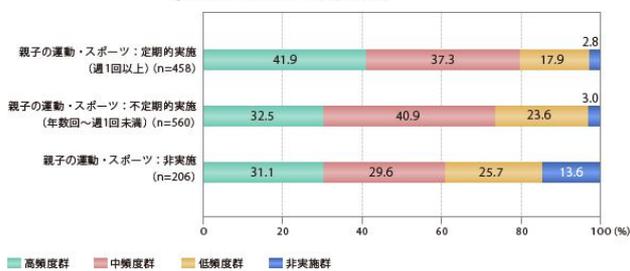
図2 子供の日常生活における身体を動かす機会



出所 文部科学省「平成19年度体力・運動能力調査」より [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/11/08100803.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08100803.htm)

図3

〔図3〕保護者（父母）が子どもと一緒に運動・スポーツをする頻度と子どもの運動・スポーツ実施頻度群



資料：笹川スポーツ財団「4～9歳のスポーツライフに関する調査」2012

出所 笹川スポーツ財団 子供のスポーツライフデータ

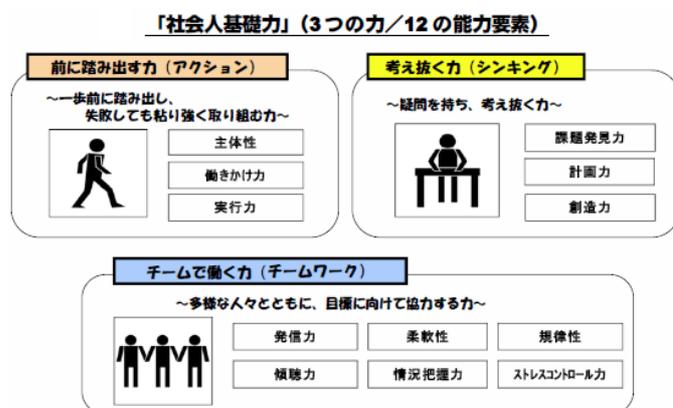
[http://www.ssf.or.jp/research/sldata/data\\_kids\\_06.html](http://www.ssf.or.jp/research/sldata/data_kids_06.html)

### ③ 着眼点

ここまでの問題点を洗い出してみると、子供たちの体力の低下という事態は、将来的に国民全体の体力低下に直結する重要課題であり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下などを引き起こすことが懸念される。年々スポーツ離れが進行している現状を踏まえ、そもそもなぜスポーツをすべきか考える。

スポーツをすることにより、大事な試合で負けた時に立ち直る力を身につけ、勝つためにはどうすれば良いか試行錯誤し、チームで協力することが出来るようになる。それが将来、子供たちが成長して「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」に直結する。それらつまり 2006 年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」である(図 4 参照)。多くの現代人が身に付けなければならない能力をまとめた「社会人基礎力」だが、言われなくても身に付けていた高度経済成長の時期に比べ、現代人は圧倒的に足りていないと考える。その証拠に SHARP は 2013 年 9 月末までに外国人採用枠を全体の 10 分 1 にまで拡大するそうだ。社会人として基礎的な能力の身に付いていない日本人より、熱意のある外国人を優先するというのだ。私たちはこの日本人のスポーツ離れ及び社会人基礎力の低下という現状について着目した。

図 4 経済産業省「社会人基礎力」



出所 経済産業省「社会人基礎力」より

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>

#### ④ 提案

子供のスポーツ離れという問題を解決するために、私たちは「青山スポーツ祭り」に着目した。「青山スポーツ祭り」は東京の地域密着のスポーツイベントで、地元のラグビー場を借り、東京のプロスポーツチームの「FC 東京」、「東京ヤクルトスワローズ」などが参加し、地元企業、地域住民、地元の学生などがこのイベントを作り上げている。その中で行われているスポーツの 1 つに「スポーツ GOMI 拾い」という競技がある。

「スポーツ GOMI 拾い」とは、企業や団体が取り組む従来型のごみ拾いに、「スポーツ」のエッセンスを加え、今までの社会奉仕活動を「競技」へと変換させた日本発祥の全く新しいスポーツである。スポーツ GOMI 拾いは日本中の市区町村が参加するチャレンジデー2012でも採用され、日本経済新聞の1面でも紹介された。このように今までのゴミ拾いの概念を覆す可能性を持つ競技なのである。

スポーツ GOMI 拾いでは他のスポーツと同様に「チームで同じ目標へ立ち向かう」、「仲間と力を合わせる」、「達成感・爽快感を得られる」、「負けた時の悔しさ」、「次は勝ちたいという気持ち」など、スポーツの持つ特有の素晴らしいキーワードが、競技者自身のゴミ拾いの価値観を一新させることができる。スポーツには、既存の価値観をプラスに転じる力があるのだ。スポーツ GOMI 拾いはあらかじめ定められたエリアで制限時間内に、チームワークでゴミを拾い、ゴミの量と質でポイントを競い合うスポーツである。

そこでこの「青山スポーツ祭り」のように、地元のスポーツチームや企業、そして今回主役の子供たちが参加できるイベントを開催することが私たちの提案である。「スポーツ GOMI 拾い」ならば、普段塾などで忙しい子供たちでも1日参加するだけで日常の運動以上に達成感を得ることができる。私たちは全国の様々な自治体でこのようなイベントを開催し、子供たちが楽しくスポーツをできる環境を整えてあげてを提案とする。

#### 資料・文献

- ・文部科学省「スポーツ立国戦略」
- ・笹川スポーツ財団「スポーツ白書」
- ・成文堂「スポーツ政策論」
- ・経済産業省「社会人基礎力」
- ・平川和文「運動の適時性」
- ・日本経済新聞（2012年5月30日付朝刊）